失われた羊のたとえ

ルカ福音書15:1-7

15:1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。
15:2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」
15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。
15:4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。
15:5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、
15:6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。
15:7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

【祈りながら考えよう】

（１）取税人や罪人たちはどんな問題を持っていた人たちですか。
（２）羊はどんなに愚かで弱い動物ですか。羊飼いがいなくても生活できますか。
（３）「ひとりの罪人」が悔い改める時、「救い主の喜び」はどれほど大きなものですか。

【解　説】

（１）イエスの話を聞こうとして近寄って来た

さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」（1-2節）

①取税人や罪人たち

14章の主イエスの教えは、見下されていた《取税人》たちや、《罪人》とみなされていた人々の心を引きつけたようである。

「取税人」は異教徒であるローマの皇帝のために税金を取り立てる人たちで、神の選民の立場からすると、彼らは「ローマの犬」であると言われていた。

「罪人」というのは、いわゆる犯罪者のことではなく、律法を守ることのできない人たち、たとえば羊飼いなどがそれであった。彼らは安息日にも休むことができず、羊の世話をしなければならないために、安息日に律法を破っているという意味で、ユダヤ教から破門されていた。そういう意味で罪人呼ばわりされていた。

彼らは「自分たちの非」を認めて、「キリストの側」についた。彼らは「真に悔い改めて」、「イエスを主」と認めた。進んで「自分の罪を認める人」がいれば、イエスはそのような人々のところに出かけて行き、「霊的な助けと祝福」をお与えになった。

②パリサイ人、律法学者たちがイエスを非難する

《パリサイ人、律法学者たち》は、イエスが明らかに《罪人》である人々と親しく交わっておられることに腹を立てた。彼らは、道徳的理由で世間から「のけ者」にされていた人たちに「あわれみ」を示さなかったばかりか、イエスがそうなさったことに腹を立てたのである。

彼らは主に非難を浴びせた。《「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする」》。彼らが言っていたことはもちろん本当のことであった。彼らはそれを非難されるべきことと思ったが、実は、主イエスが「この世に来られた目的」が成就していたのである。

彼らが非難したことに対する「答え」として、主イエスは「失われた羊」、「失われた銀貨」、「失われた息子」のたとえ話をされた。これらの話は律法学者やパリサイ人たちに直接向けられたものであった。彼らは、「自分が失われた状態にあることを認めて、神の御前に砕かれる」ということが全くなかった。

実際、彼らも取税人や罪人たちと同じように「失われた者たち」だったが、かたくなにそれを認めようとはしなかった。この３つの話の要点は、「神」は「罪人が悔い改めるのを非常に喜ばれる」が、高ぶって自分が罪深い者であることを認めない偽善者からは、何の喜びも得ないお方だということである。

（２）いなくなった羊のたとえ

そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。（3-4節）

ここでは「主イエスが羊飼い」として象徴的に描かれている。《99匹》の羊は「律法学者やパリサイ人たち」を表している。《いなくなった》羊は「取税人や罪人たち」を表している。

①羊という動物の特徴

羊という動物は「愚か」で、羊飼いがいないと生きていくことができない生き物である。どこに草があるのか、どこに水があるのかも分からないから、羊飼いが彼らをそこに連れて行かなければならない。

羊に羊飼いが必要なのは、それだけではなく、狼が襲って来る時、羊を守ってやらなければ、その餌食になってしまうほど、「弱い生き物」である。

羊は羊飼いがいても、群れを離れて、どこかへ行ってしまうことがある。１匹だけが夢中で草を食べ、ほかの群れから離れてしまい、気が付いた時には、羊飼いもほかの羊もいなくなっているということがある。

その時、羊飼いはほかの羊をそこに残しておいても、いなくなってしまった羊を捜し求めて、歩き回る。時には、危険な谷間に落ちている羊を見つけることもあって、その時には「命がけ」でその羊を救い出す。

また疲れ切ってしまい、しゃがみ込んでいて、鳴き声も出すことができず、動けなくなってしまっている羊を見つけ出すこともある。その時には、その羊を肩に担(かつ)いで帰って来る。帰って来ると、友だちや近所の人たちを呼び集めて、みんなで喜ぶ。

②聖歌431番の歌詞

羊飼いは、自分の羊のうちの《１匹》が《いなくなった》ことに気づき、《99匹》を（囲いの中ではなく）《野原に残して》、その一匹を《見つけるまで》捜し歩く。

羊飼いが羊のあとを追った旅を、私たちの主に当てはめたとしたら、主の地上降臨、公生涯、拒絶、受難、死ということになる。まさに聖歌429番（総合版431番）「99匹の羊は」の歌詞のとおりである。

聖歌431番「99匹の羊は」

①99匹(ひき)の羊は 檻(おり)にあれども
戻らざりし一匹(いっぴき)は いずこに行(ゆ)きし
飼(か)い主(ぬし)より離れて
奥山(おくやま)に迷(まよ)えり　奥山(おくやま)に迷(まよ)えり

②「99匹(ひき)もあるなり 主よ よからずや」
主は答えぬ 「迷いしものもわがもの
いかに深き山をも
わけ行きて見い出さん　わけ行きて見い出さん」

③主は越え行きたまえり 深き流れを
主はすぎ行きたまえり 暗き夜道(よみち)を
死に臨(のぞ)める羊の
鳴き声をたよりに 鳴き声をたよりに

④「主よ山道(やまみち)をたどる　血潮(ちしお)はなにぞ」
「そは一匹の迷いしもののためなり」
「御手(みて)の傷は何ゆえ」
「いばらにて裂かれぬ　いばらにて裂かれぬ」

⑤谷底(たにぞこ)より空(そら)まで 御声(みこえ)ぞ響く
「失(うしな)われし羊は見出(みいだ)されたり」
御使(みつか)いらは答えぬ
「いざ共に喜べ いざ共に喜べ」

（３）大喜びでその羊をかつぐ

見つけたら、大喜びでその羊をかついで（5節）

羊を見つけた羊飼いは《その羊をかついで》家に連れて帰った。このことは、助け出された羊が、「特別かつ親密な立場」に置かれたことを示している。

帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。（6節）

羊飼いは、いなくなった《羊》が救い出されたことを《いっしょに》喜ぶために、《友だちや近所の人たち》を呼び寄せた。これは、ひとりの罪人が悔い改める時の「救い主の喜び」を物語っている。

（４）ひとりの罪人が悔い改めるなら大きな喜びが天にある

あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。（7節）

ここでの教えは明らかである。《ひとりの罪人が悔い改める》時、《喜びが天にある》。しかし、自分が失われた状態にあることを自覚していない99人の罪人に関しては、何の喜びもない。

７節は、「実際には、悔い改める必要のない人もいる」と言っているのではない。すべての人が罪人であり、救われるためには、だれもが悔い改めなければならない。この節は、自分は《悔い改める必要のない》者だと思い込んでいる者たちのことを言っている。